島根大学法文学部紀要　文学科編　第24号　(1995. 12)

『僑呉集』について

要　木　純　一

元末における江南ナショナリズム（と便宜的に命名するもの）の多層的なあり方について、筆者は関心を持ち続けている。金の北中国占領の脅威を一因として、南宋においてすでに士大夫のみならず庶民に至るまでの一種のナショナリズムが成立していたが、それはなお南宋全体で論ずるべきであって、江南が他に対して、ひとかたまりになって、という感じではなかった。モンゴルによる占領という事態になって始めて現れたと思われるこの江南ナショナリズムの感覚は、実に一言もて蔽いがたい錯綜したものである。たとえば、鄭思肖のように反モンゴル一辺倒の文人を江南ナショナリズムの代表者とするわけにいかないのは、元代の文集のほとんどにモンゴル・色目人官僚に対する賛辞や交友の記録が多く見えることで分かる。もちろん、裏では反モンゴル感情を大多数が持ってはいたであろう。しかし、それだけでは論じ尽くせない何かがあったのであり、また元代の詩文はただの阿諛追従者の文字として、文学史で切り捨てるには余りに惜しい面白さがあるのである。

各個人のアイデンティティと微妙に絡まった、この江南ナショナリズムは複雑な様相を呈するので、どうしてもその説明は混迷を極め、致し方無く矛盾を矛盾として遺したまま羅列的に記述するにとどまる点も多いであろうが、そもそも人間存在自体が、諸要素が互いに矛盾しながらも結合しあう有機的全体であってみれば、元代においてはそれがあらわになったというだけだともいえる。後世の我々に変節に見えるような、文人達の豹変を、道義的に責めるのをしばらく待って、彼らがなぜそのような行動をとったか、できるだけ感情移入して考えてみることが、もつれた糸を解きほぐす第一歩となろう。

本論文で扱う『僑呉集』の作者鄭元祐は、元後期の学者にして文人であるが、正史に伝なく、文学史的にとりあげ

られることもまれである。しかし、元末の混乱期において知識人界の長老として一定の見逃すべからざる役割を果たし、その作品に割合に江南ナショナリズムを背景とした表現が多く、元末文人の中で探究に値する一人であると筆者は考える。

彼の生涯の概要を知るために、顧嗣立『元詩選』所収の彼の伝記を引く。「元祐、字は明徳、処州遂昌の人。其の父、希遠は家を銭塘に徙す。是の時、咸淳の諸老は猶お在り、元祐は遍く其の門に遊びて、疑を質し隠を稽る。充然として得る有り、奇気を以て自負す。父没して、平江に僑居す。学者雲集す。浙省の臺憲は争いて潜徳を以て之を薦むるも、臂疾あれば仕うるを願わず、呉中に優遊する者幾んど四十年なり。至正丁酉（一三五七）、平江路儒学教授に除せらる。一歳にして、疾を移して去る。後七年、江浙儒学提挙に擢んでらる。居ること九月にして卒す。年七十有三、時に至正二十四年（一三六四）也。明徳は児の時、乳媼手を失するを以て、右臂に傷つくるを致す。長ずるに比びて、能く左手もて楷書を作す、規矩備さに至り、世は一絶と称す、遂いに自ら尚左生と号す。文章を為ること滂沛にして豪宕、古えの作者の風有り。詩も亦た清峻にして蒼古なり。時に玉山主人草堂文酒の会、名輩畢く集まる。記序の作、多く焉れに推属す。東呉の碑碣には、館閣を貴とばずして而して其の著する所を貴ぶ者有り。晩年自ら其の作る所の文を彙めて以て謝徽に授けて曰く、吾は杭に在りても亦た嘗つて作有るも、茲ここに呉に僑すること久しく、而して作の多しと為すを以て、故に之に名づけて『僑呉集』と曰う、と。張士誠平江に拠るに当たり、東南の文士は之に依る者多し、明徳最も一時の耆宿為りと云う」

すなわち、西暦一二九二年（後述『僑呉集』附録蘇大年「遂昌先生鄭君墓誌銘」による）から一三六四年まで、ほぼ元代をおおう時期を生きた人である。江南といっても、やや僻地に属する処州の籍貫で、幼時は杭州で育った。右手に障害があり、それが彼の生き方や文学に大きな影響を与えたであろうが、本論では論じない。のち蘇州（呉、平江）に移り、晩年に至るまで滞在（「僑」）した。

彼の別集は『僑呉集』としてまとめられたが、ここで本論で鄭元祐の考え方を知る依拠として扱うこの集について簡単に説明する。引用のテキストは『僑呉集』（国立中央図書館編印、元代珍本文集彙刊、一九七〇）を用いた。こ

れは、台湾国立中央図書館所蔵の抄本の影印である。いまその冒頭に附せられた劉兆祐氏の「叙録」に拠って大要を紹介する。

本抄本の末尾、弘治丙申（九年、一四九六）付けの張習の「刊『僑呉集』録」によると、

「『遂昌山人集』二十巻有り。僅かに詩と文とに分かれ、而して類叙無し。皆漫稿也。又『僑呉集』有り、編次は固より当たれるも、然れども繁蕪重出多し。生（因りて？）之を通録して、其の詩文の精純なる者を得たり。併せて一十二巻と為す。仍お『僑呉』と名づく。梓を用て以て伝う」

張習は『遂昌山人集』と『僑呉集』（こちらは『僑呉集』冒頭の謝徽の「序」にいう巻数に一応合っている）の二テキストを見、『僑呉集』の編次に合わせて再編集して刊行したらしい。後、『遂昌山人集』の方の著録は無く、早く亡びたらしい。本抄本は、この弘治刊本あるいはその系統本を筆写したものであろう。本文十二巻の他に、補遺一巻があって、清の鮑廷博の蒐集による鄭元祐の逸文逸詩がまとめられている。そして、巻末に清の姚鋤の題記があって、「知不足斎蔵本に伝わる」とある。他にも、刊本、抄本がいくつかあるが、巻数等が一致し、内容に大差は無いとみてよいようだ。（『四庫全書』にも収められている）

上記『元詩選』の伝記の大部分は、『僑呉集』末尾に附録せられた蘇大年の「遂昌先生鄭君墓誌銘」に拠っている。まず、この史料を中心に、彼の生涯や人間関係を追いながら、後論を先取りする形で彼のもつナショナリズムがいかなる性質をもったかに言及する。

「墓誌銘」では「処州鄭氏は、遂昌の鉅族也。君は世よ儒を以て顕る。曾祖克は、故の宋西川経略使。祖開先は、朝奉郎知道州永明県。考石門高士は、諱希遠、高尚にして仕えず」という。代々儒者の家柄で、曾祖父は宋代に四川で官吏をしたという。おそらく、中国全土に関する情報は家に伝わっていたろう。「漕府李侯の北に帰るを送る序」（『僑呉集』巻八）に「第だ余は辰ならず、銭塘の湖上に生長し、南遊は婺に止まり、北遊は楊に止まる」とあるように、鄭元祐は終生江南から一歩も出なかったが、偏狭なナショナリストにはならず、時代、地域を越えた関心を持ち

続けた。元代に入ると「国初、家を銭唐に徙し、屋を湖上に結び、耕釣を以て自ら楽しむ。妣蔣氏、二子有り、君は其の仲也」幼少から（おそらく出生から）杭州に住んだ。杭州は行中書省が置かれた、江南の中心地である。彼の性格には、田舎出身の儒者としての固さと、都会人としての洒脱さが並立しているようである。そして、杭州は南宋の首都であったことも、彼の学問に影響を与えた。「時に咸淳の諸老猶お在り。君遍くその門に遊び、疑を質し隠を稽る。其の見聞は充然として得る在り。侃々として奇気を以て自負す。諸老節を折りて之に下る」彼及び彼と同年代の人たちが、幼時遺老達から間接的に宋の遺事を聞いたことが、後年の江南ナショナリズムを育成したではあろう。ただし、直接の経験ではないから、あくまでも現状肯定であり、反元どころか、むしろ体制の中の栄達を望んだことは、他の同時代人と同じであった。仁宗の時の科挙復活は、何よりも江南の読書人たちに歓迎されたのである。

「江浙行中書省郎中趙天錫は、剛正謹厳にして、交際に慎む。独り君を家に延きて、其の子期頤の与に講学す。期頤は後に甲科に中る。即ち中書参知政事の子期公也」後述するごとく、この趙天錫は北方人で、モンゴルに従って、杭州に入った大官であり、鄭元祐はこの人及びその子期頤の近づきになった。「時に薇林平章廉公は朝廷の宿望を以て銭唐に退居す。君と忘年の交わりを為す。君是由り遍く当世の士と交わり、声名は籍甚たり。四方君を慕う者は、識ると識らざると、皆称して明徳先生と為す」廉公は、畏吾児人、世祖に仕えた大官廉希憲の子、廉恂と思われる。このように、鄭元祐は実力が支配階級の北方人、色目人に認められることによって、士大夫界での名望を高めた。注意したいのは、そのことに対して、士大夫界も反民族的だというごとき反発を見せず、それどころか非常に歓迎したらしいことである。或いは、科挙に合格して出世するコースよりも名声を得るのに有効であったかもしれない。

やがて父の死をきっかけに蘇州に移る。「石門君卒す。君は其の兄の介甫先生と偕に姑蘇に移居す。兄歿して、之に喪すること父の如し。君に従いて学ぶ者戸外の履常に満つ。浙省の御史府、宣閫、憲臺は章を交わして、潜徳を以て君を朝に薦む。君は自ら臂疾を以て仕うるを願わず。在廷の諸公も、君の志しを知りて、亦た甚だしくは相い屈せざる也」蘇州でも名声は高く、処士として生きることにしたのだが、この間、決して世に超然としていたのではなく、いろいろな運動を陰に陽に行ったであろうことは後に述べる。

「呉中に優遊する者、三四十年。富貴声利一も其の心を動かさず。素より書を著すを喜ばず。嘗ねに学者に謂いて曰く、経は則ち経也。史は則ち緯也。義理の淵藪は焉こに在り。学者に能く尽く古人の意を得る者は鮮し矣。況や敢えて私に論述する所有らん乎、と。識者は其の道に見有るを称す」史を重んじる点に注意したい。自国の歴史を学ぶことは、異民族支配下にあっては危険なはずであるが、そのような議論を許すような柔らかな秩序下に江南はあり、そこに独特のナショナリズムが成立したとはいえないか。

「性は平易真率、矯激の行いを為さず。人と交わるも亦た然り。後進を汲引すること常に及ばざるが如し。頭は童に歯は豁なるも、壮気は衰えず、応酬の餘暇、手に巻を釈かず。呉人は風裁を欽仰し、之に敬礼せざる者罕し。小夫賤隷も亦た能く君の姓名を知る。人に患難有れば、之を拯抜すること水火を救うが如し。士友或いは貧にして、自ら存する能わず、以て相い給する無しと度れば、則ち遍く諸有力者に告げて、其の困阨を賙わしむ」道学者にありがちな、己を高くして孤立するようなタイプではなく、面倒見がよかった。また、そのような文人界の巨細にわたるネットワークこそが、江南ナショナリズム、同胞意識の背後にあったであろう。

さて、問題は顧嗣立が言及した、長老として張士誠政権に協力したことの解釈である。至正十六年（一三五六）張士誠が蘇州を占領する。翌年、朱元璋との対抗上、張は元朝に投降するが、それは形式に過ぎない。そして「至正十七年大府は将仕郎平江路儒学教授を授く。君は欣然として辞せずして曰く、講学は我が素志也。居ること一歳にして、即ち疾を移して去る。後七年江浙儒学提挙に陞る。君亦た辞せずして曰く、文臺也。儒者の職也、と。居ること九月にして、微疾に感じて而して卒す。朝官士友の遠近に聞く者は、奔赴せざる莫し」「欣然」とか「不辞」というわざとらしい表現は、おそらく鄭元祐が蘇州で生きるためにいやいやながら仕官したことをかえって暗示するのであろう。しかし、本心を隠した演技であるにせよ、ともかく形式上は元朝の官職であり、蘇州の文化、教育をになうのは儒者の責務であるということを大義として宣言したことは、江南ナショナリズムの独特なあり方がしからしめたと筆者は思う。本論の主題は、鄭元祐の本音を探るというよりも、その演技的なパーフォーマンス（それを見る者も演技ということは承知であったろう）が意味を持つ空間の構造の解明に重きをおくであろう。

鄭の死後「孤起ちて状を以て銘を請う。僕泣きて而して之を撫して曰く、君は天地の全人也。承平に生長し、晩に世変に渉る。骨肉は竟いに相い保ちて虞れなし。又且つ十年の福を安享して而る後逝く。蓋し君は明哲保身、行業は素より造物に愧づる無く、而して造物の君に報ゆる者も亦た厚し矣」「安享十年之福」「明哲保身」という表現も、鄭の晩年の仕官がやむを得ざるに出でたことを示すだろう。

以下、『僑呉集』の本文を中心に、鄭元祐及びその周囲の人達のナショナリズムのあり様の、いくつかの特徴を述べたい。

まず、江南ナショナリズムというが、それが決して観念的に「江南」なり「民族」なりを措定するのではなく、現実に住み生きる人間に対する強い関心から成り立っており、それと相い表裏して強い人間関係、ネットワークが結ばれていたことを見よう。

『僑呉集』をひもとけば、鄭元祐が様々な有名人物と詩文を応酬していたことはすぐに分かる。後世に文学者として名を残した人には、楊維楨はじめ、張雨、倪瓚、薩都剌、顧瑛などがいて多士済済である。ただし、高啓ら交わりが見えぬ名士もあるが、これは、高啓らの方が当時主流の楊らの文芸に反発を感じて、交際を避けたのが原因であろう。

蘇州における、鄭元祐の生活や文学活動をパトロンとして支えたのが、文学愛好者の素封家顧瑛である。その大庭園玉山に寄せる「玉山草堂記」が『僑呉集』巻十に収められているのをはじめ、玉山の様々な名勝に題記を草した。また玉山で名公たちと遊び、応酬の作を多く残しており、それらは『僑呉集』の附録に数十首収められている。

そのつき合いのあり方も、道学者の固さが少なく、ざっくばらんであった。袁華『耕学斎詩集』巻五（『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館発行所収）に「鄭明徳先生寿器を売りて以て婿を贅す。玉山道人（顧瑛）復た一棺を贈る。詩を賦して以て謝す。予に次韻するを邀む」なる詩が収められている。以下全文を引く。

「山人の右臂は枯れて稜有り、日に硯田を耕して剡藤を耘ぎる。祗だ今年は已に六十五、時に感じて旧を思い身は凌兢す。文章は海内に当日に鳴りしも、老病窮愁は蝟集の如し。子亡に女長じて当に婿を贅すべきに、銭無く棺を売る

は情として豈に恤しまん。江空しく木は落ちて西風高く、短衣破屋捜牢に驚く。玉山に相い逢いて涙は霰を流し、老いたる我太平は再び遭い難しという。玉山義を重んじて水火に急なり。為に楠木の棺を製す、蚕の纏裹を得るが若し。便ち老僕を呼びて鍤を荷ないて随わしめ、酔死すれば何ぞ妨げん即ち我を埋むるを。君見ずや北邙山、荒墳は白草の間に累累たり。金を積む何ぞ如かん陰徳を種うるに、黄鳥能く致す三公の環」

婿をとるための資金調達に鄭元祐がかねて用意の棺桶を売ったのに対して袁華の送った詩である。「墓誌銘」によれば、鄭元祐には三子あったが皆早世し、娘一人が残った。この詩は鄭の窮乏に対する同情心は深いものの、やや嘲謔的な悪ふざけに傾くように思われる。鄭元祐自身の詩が『僑呉集』に見えないのは残念であるが、この詩からも、棺桶という素材が引き起こすおかしみや鄭元祐の情けない状態（貧乏のどん底というわけではあるまい）を、忌みはばかることなく哄笑してもよいような社交の雰囲気がうかがえる。そこには濃密な人間関係がある。それらを背景に江南を愛するナショナリズムは生じているであろう。

無論、遊びの文章のみならず、「呉県儒学門銘」（『僑呉集』巻七）「平江路新築郡城記」「重修平江路儒学記」（『僑呉集』巻九）など公的な碑文を依頼されることが多く、地域の知識人のリーダー、長老として、流寓の地蘇州で確固たる足場をもったであろうことがうかがえる。これが彼の表の顔である。

そして、地元民でかたまらず、支配階級たる外地人とも交わる、それも積極的に交わるのが、鄭元祐一流のナショナリズムであった。それを、異民族支配への屈服ととるか、江南の豊かさを背景とした、おうようさ、柔軟さととるかは、立場の違いによろう。今は具体的な事例で、その実態を見る。

まず、鄭元祐の最初のパトロンであった趙天錫、期頤父子との関係である。鄭元祐は『僑呉集』の他に、『遂昌雑録』（『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館発行所収）という元初の逸事を記した筆記小説を残している。その中にいう。

「今の河南行省の参知政事の宛丘の趙公、名は期頤、字は子期。其の先府君の宛丘公、諱は祐、字は天錫、江浙行省の照磨為る時、余其の家に客たり。宛丘公嘗つて言えらく、其の家は陳州に在り、瓦屋一横、人称して趙総把の家と

為す。国家毎歳の秋、統兵官、兵を将いて、江の南北（原作比、今改）を哨す。県に至れば民間に竟に歇泊す。初めて至るときは、極めて厳毅なるも、再歳三四歳にして情契故きが如し。一日哨馬南に帰り、一縲囚を睹る。両足凍えて堕つるに垂んとし、馬足の間に呻吟し飢凍す。宛丘の父、囚に誰為るかと問う。囚顰蹙して曰く、我は南宋の官人にして、盧州の通判の胡某なり。城破れて虜とする所と為る、と。公の父復た問う、是くの如くんば汝は則ち是秀才か、と。囚復えて曰く、我は春秋もて科に登る、と。公の父曰く、汝此くの如くんば則ち能く教学するや否や。囚曰く、豈に秀才にして教学する能わざる者有らん乎、と。公の父、統兵官に請い、両馬を用て易えて之を得。浣濯するに湯液を以てし、包裹するに氈毳を以てし、糜酒を温めて以て之を飲食せしむるに、絶えんとして復た蘇る。蘇れば則ち両足堕つ矣。因りて其の姓字貫籍を問い、遂いに延きて其の家に致し、以て諸子に教迪せしむ。是の時、淮以北、挙く全書有るを知らず。胡通判は其の憶記する所を以て諸生に授く。六年を更て而して後殂す。因りて之を屋後に葬る。歿するに臨み、宛丘公の家に謝して曰く、我が分は六年の前に死すに、重ねて汝の家の延く所となる。汝の家、後必ず斯文もて顕わるる者有らん、と。子期の丁卯の科に登り、文儒を以て政府に登るに逮びて、而して其の二代も皆二品に封ぜらる。信なる乎、斯文の報いの致す可きことは、と云う」

これは、趙期頤の父で、宛丘公趙祐、字は天錫から著者鄭元祐がきいた話である。天錫の父、したがって期頤の祖父の趙総把は、蒙古軍の捕虜となった南宋の士人胡某なるものの危難を救い、それをわが子の家庭教師とした。その報いで孫の期頤は、進士及第して大官になったという。この趙期頤は、先にも言及したが、趙宛丘としてしばしば『僑呉集』にあらわれ、鄭元祐を引き立てるのに大いに力を尽くした人である。

吉川幸次郎氏は『元雑劇研究』　上篇　元雑劇の背景　第二章　元雑劇の作者（上）でこの趙天錫は、すなわち『録鬼簿』に、趙天錫　汴梁の人、鎮江府判、といい、「試湯餅何郎傅粉」「賈愛卿金銭剪燭」と、二種の雑劇を録する人と同一人物であると言う。（『吉川幸次郎全集』巻十四、一一一頁～一一五頁）これに対して孫楷第氏はその著『元曲家考略』（上海古籍出版社、一九八一）の趙天錫の項目（一四一～一四四頁）で『録鬼簿』にいう趙天錫は、至順『鎮江志』巻十五、巻十七に見える趙禹珪、字は天錫、至順元年より三年まで鎮江府判官となったとあるひとで別

人物だという。（ここで付言すれば、北方雑劇、散曲を、創作しなかったにせよ、受容したかどうかで、江南知識人を二派に分けることができる。すなわち、異文化の新奇を好む都会派と好まない保守伝統派である）いずれにせよ、ここでは、北方人の中に、江南の文化に感化され、学識を深めて、積極的に江南の読書人ネットワークに参加する者が現れたことを指摘したかった。文化程度が高ければ、かかる外地人をも受容する点に江南ナショナリズムの特徴があろう。

蘇州に移ってからも、外地人の高官と積極的に関係を結ぶ。「再び監司達白野先生に奉る書」（『僑呉集』巻七）は、当時の大官にして科挙合格文人の泰不華（達普化、元史巻一四三に伝あり）に、わが子佶に吏のポストを世話してほしいと頼み込んだものである。みずからの右手が不自由であること、趙期頤の家に招かれ、家庭教師をしながら、学問に励んだが、貧窮に苦しんでいることを紹介したのち、一転して子供の就職に関する依頼を始める。趙期頤は「年壮に及びて而して未だ娶らず」ぬ鄭元祐に「呉下の貧医の女を娶らしむ。遂いに連りて三児を得。独り長児のみ存す」「去冬趙公は国子祭酒と為る。雲中の李公仲賢は湖南憲由り漕府万戸に除せらる。京を離るるの日、趙公は躬ら其の寓に至りて、某しの子盍ぞ小吏に補して、以て糊口し、而して親を瞻（やしな）わざる、と道う。李公斯文の故を以て、車を下るに及び、即ち某しの僦居に過ぎる。而して趙公の言を以て告ぐ。是に於いて児の佶は李公及び今の漕長章公に荷いて之を成就する也」そして就職が決まったと思ったら「豈に料らんや、李廉使一旦官を棄てて北上するや、平江の富人程丙なる者有りて」賄賂によってわが子のポストを奪ってしまった。

「某しは自ら惟念すらく、貧病此くの如し、苟くも趙李二公斯文を垂念せずんば、則ち佶児は区々たる所吏すら、夢想の至らざる所ならん」そして話が大仰になる。「趙参政、李廉使は皆太平の盛世聖君の賢相を以て、時の五福を斂めて庶民に錫うを以て心となす。是に於いて小児を造就す。龕合の禄を得、以て某しの病廃残骸を養わ令む。今缺期は邇きに在り。而して乃ち富家の小児に奪わる。然れども、敢えて自ら黙せざるは、趙李二公の厚徳に孤く有れば也。是に於いて上告す。脱しくは能く宣布せられんか。聖君賢相、福を斂め民に錫うは、冤なる者は吐くを獲、屈する者は伸ぶるを獲、貧老皈する無き者は養わるる所有るを獲るに先んずること莫し。是則ち閣下の任なり」

息子の就職が天下国家にかかる大事であるといい、あたかも泰不華の不行き届きを責めるが如き口吻は、異様に傲慢に感ぜられるが、これは追いつめられてなりふりかまわなくなった様をわざとあらわにする戦略かもしれない。というのは、この直前に収められた泰不華への最初の手紙「達監司に上まつる啓」も、回りくどい言い方で息子の就職の世話を求めた手紙であるが、その結果が不首尾であったので、今回強く出たとも考えられるからである。

この書は、なりふりかまわぬ子への愛情、自己の貧しさ故の心細さによる屁理屈とみなされようが、鄭元祐の真意が那辺にあるか、今は問題とせず、この理屈になっていない議論に透けてみえる、彼の国家に対する態度を考えたい。我利我欲のために国家を持ち出しているわけだが、自分に見返りがなくて、何の国家だというのが正直なところなのかもしれない。つまり、あくまでも世話になる大官を通しての国家であり、観念的に頭に宿るものではない。実利的なまでに現実的だからこそ、後世の我々がみれば、不純にみえるが、鄭にとっては、国家というものは結局かかるものにすぎないのである。ただ、「斯文」を以て国家を論ずる点は、後述する江南ナショナリズムの文化至上主義によるであろう。

国家を観念としてではなく、現実的にとらえる鄭元祐のかかる態度は、自分を養ってくれる王朝を否定することはなかった。批判するにしても、元が江南を支配したままで、理想に近づくことを望んだ。この元に対する彼なりの忠義の質が分かる作品をいくつかあげる。

「杭州即事」(『僑呉集』巻五)其の一「瓦礫は堆堆として路拗を塞ぐも、巷陌尽く蓬蒿なるに遊ぶに勝る。祠宮地に臥す駝鳴きて圜たり、祕殿春に扃じられて馬矢して臊(なま)ぐさし。山色は今度の惨なるに如くは無く、潮頭は昔時の高きに似る可けんや。王師は貴きこと能く安集するに在り、豈に必ずしも兵行きて血刀を漬けんや」賊が各地に起こってよりしばしば杭州は侵略された。賊を追い払うために導入された王の軍隊(王師)も、略奪をほしいままにした。廃墟を前にして鄭元祐はそれでも元王朝に期待する。軍事的手段ではなくて、平和的に解決する道があるであろうと。

秩序の大本の皇帝に対する崇敬はいささかもゆるがない。世祖皇帝をしばしばたたえる。「汝陽張御史死節歌」

（『僑呉集』巻三）では至正十一年（一三五一）賊と戦って死んだ張御史（名は垣、元史巻一九四に伝あり）を忠臣として素直にたたえる。張のおかげで平和が到来したことを喜び、末尾は「井を鑿ちて田を畊して帝の力を歌わん」と歌って順帝の徳を称揚する。

現実的な愛国心は、空想的な論を弄せず、現実に有効な策を考える。鄭元祐の場合は、それは人間ネットワークをフルに使うことであった。たとえば、「劉長洲を送る」（『僑呉集』巻一）「中呉沃土と号し、壮県長洲を推す」呉の土地は肥沃であるが、「秋粮は四十万、民力誅求に罷る」以下民が苛斂誅求に苦しむ様を述べる。そこへ「天意は困劇を憫みて、南のかた卯金侯を輟す。侯万金の剤有り、囊を探りて病を瘳ら令む。躄者は起ちて雀躍、瘖者は言いて嘲嘲。坐して百里の邑をして、姦回彫鏤を息む。是皆仁侯の恵み、頌声道に満ちて周ねし。清朝に老功は選ばれ、賞典は滞留無し。願わくは侯廊廟に登り、一に蒼生の憂いを洗え」これは実は劉の功績をたたえるに意があるのではなくて、詩の前半に描写する蘇州の直面する困難をこそ、中央政府に取り次いで欲しかったのだ。彼が人に詩文を送る場合の多くに、自分や自分の周囲のことをよろしくという意が裏にある。天下国家を大上段に論ずる文を書くことは少ない。むしろ個々の人間関係において相手に真意をもらす方が有効という判断があったようだ。

このような現実性は、やはり他と比べて経済の発達した蘇州なればこそ生まれた精神であろうか。送友還郷（『僑呉集』巻一）では、挫折して故郷に帰る友人に対して、呉の土地の好いことをいい、「官有れば固より当に帰るべし、官無くして帰るも亦た好からん」と締めくくる。官がなくてもとにかくやっていける、蘇州の豊かさ、文化、交友の楽しさがさりげなく讃えられている。

『僑呉集』巻八「思賢録序」は、謝応物がその故郷常州出身の北宋の諫臣鄒忠公の事跡を集めた書『思賢録』に寄せたものである。その中の、常州が「宋の亡ぶるに当たり、独り城守して下らざるは、其の民は殲すと雖も、公の忠義の然ら使むる也」という部分は、たとえば清の時代では公表不可能な叙述ではないか。これを反蒙古の言とするのは深読みであり、詩文の語句の端々に目を光らせないルーズな元の統治体制であればこそ、現れた表現であり、元朝を否定する気持ちはさらさらあるまい。

元朝であればこそ生まれた我々のアイデンティティであり、時代を否定することは自分自身を否定することであり、自らの生き方をあくまでもこの衰退しつつある時代に位置づけようというのが、当時の知識人の共有の認識であったのではないか。

鄭元祐と同時代を生きて、元朝、張士誠政権、明朝どれにも距離を置いた処士として知られる王逢は、鄭元祐の死を聞いた時挽歌を寄せた。『梧溪集』（『知不足斎叢書』第二十九集所収）巻四上所収「故遂昌先生鄭提学挽辞」である。

「処士星は夜明るく、先生処州に生まる。六経胸に淹貫し、百氏目に漁蒐す。筆の繡絲は五色、花の様購求を従い（ほし）ままにす。器は大にして晩れて始めて成り、両たび東諸侯に辟さる（太尉張公を謂う）。……幼くして西湖に遷り、淳祐前修を餘す。　林（平章廉公）と竹楼の間、弦歌觥籌を継ぐ。甲科の趙期頤（中書参政趙公）笈を負いて衣は躬ら枢す。偶ま姑蘇台を覧て、遂いに成す賈胡留まるを。克荘（廉使韓公）弊は遠くより至り、兼善（状元泰公）礼は逾いよ優れり。……欝欝たり石門山、故隴（曾祖の克宗は西川経略使、祖の開先は知道州永明県）は阻まれ且つ悠たり。橘霜ふり屋洞浄く、剣は虹のごとく虎丘光る。好く干（尚書干公文伝）柳（待制柳公貫）を驂し、遠く虞（文靖虞公集）黄（文献黄公溍）の軺を拉く。超然たり地下の楽しみ、邈たり矣塵中の憂い」

（　）内は原注である。王逢は人名や事績に詳しく注を施したことで有名であるが、これは王逢の他の詩と比べても、人名注が甚だしく多い。あくまでも現実の人間関係の中で鄭元祐をとらえようとする挽歌であり、学者に対する挽歌で常套であるような、古代にさかのぼって伝統の中でその人を位置づける修辞を用いない。元の時代に生きたわれわれという立場を、元末の文人達は越えようとはしなかった。それを視野が狭いというのはあたるまい。自らの立脚地に素直でありたいと思ったのであろう。

文人・学者である以上、伝統主義者には違いない。しかし、それは現実的な関心に支えられている。そのためか鄭元祐ら元末の知識人の場合、現在に近い時代、特に宋元革命期に興味の多くがそそがれているようである。それが、

即反元に結びつかないことはすでに強調した。『僑呉集』巻二『古墻行』の序に、幼い時、宋諸王子孫の住居跡を巡ったことが述べられているが、鄭のこの興味は、南宋の記憶が遠くない時期に生まれたことによるのであろうか。

先述の『遂昌雑録』も宋末元初の諸公の事績の筆記であるし、書画の趣味もおもにその時期に偏るようである。『僑呉集』には「趙松雪画」（巻二）「趙松雪画馬」『僑呉集』（巻三）「重題温日観」『僑呉集』（巻二）などのこの時期の作品に対する題画詩が見える。

岳王廟の再建と維持も重大関心事で諸大官に働きかけて宿望を果たした。（「重建岳鄂王忠烈廟碑」『僑呉集』巻十一。「与杭州路廉宣差起咨褒封岳王書」『僑呉集』巻七）一般に元代中国の古跡には、当時のままのものは少なく、明代に再建されたものが多い、どうも元末江南からこの気風が始まったのではないかと筆者は考えている。

さて以上、鄭元祐の江南ナショナリズムについて、元朝に対する帰属心と絡めて、その特徴をいくつか述べた。便宜的にナショナリズムという語を用いたが、この語が我々に与える排他性のニュアンスは、筆者のいうナショナリズムには比較的に乏しい。最後に江南ナショナリズムが、地域に閉じ込もるのではなく、外部への志向をもつことを強調して置きたい。

鄭元祐は生涯江南を出ることはなかったから、『僑呉集』所収作品の大部分は当然江南を舞台とするが、幾つかは外の世界を描く。例えば、「韋皐銅像賛」（『僑呉集』巻七）。その序によれば、韋皐は唐末の知識人で忠義の人として知られるが、「出でて西川節度使と為る。時に吐蕃と南詔とは、時ならずして入寇す。而して皐は能く間を用いて奇を出し、南詔は復た臣となり、吐蕃は援を失う。西南の民は、遂に蘇息を獲。徳宗は其の功を異として、検校司徒兼中書を加う。今南康郡王に封ぜらる。蜀の人之を徳とし、銅を範して皐の像を為るに至る。故老相い伝えて、大家は皐の像を鋳して、皐の身と等しきに至る。中人の家は又之に次ぎ、貧下小家と雖も、亦た銅を鋳して小像を為る、長さ僅かに二三寸許り。歳時祭拝すること、神明の如し焉。唐亡び、皐の大像は、之を見る莫きも、其の小像の民間に散落する者は、用いて鎮紙と為すに至り、毀を致すに忍びず。夫れ皐は一介の書生なるも、其の功は煥烈し竹帛に耀

く。而して其の小像の海宇に流伝する者は、何ぞ千百に止どまらん。人人は、是れ之を唐の韋皐と称す」賛には「唐の社は已に灰となり、皐の像のみ独り存す。世に董狐無くんば、孰か蒙昏を昭らかにせん。千万年に於いて、我が舌は捫せず」という。おそらく曾祖父が四川で役人をしていた関係もあろう、遠い晩唐の四川と微妙に交感し、一体感を感じている。目前の銅像を前にして広がる妄想ともいうべき思考の連鎖が背景にあろう。知識人として韋皐に同一化し、その忠義を偲ぶ、唐は滅んだが、その像が残り、忠義の名声は滅ばないといったような錯綜する思考の連鎖が。恐らく鄭元祐にあっては、その忠義の対象は元朝へと向かうであろう。かくのごとく、江南ナショナリズムといっても、江南にとどまらず、全中国へ、全歴史へと広がる志向を内に蔵しているのである。

さらには四川より遠く、行くことなど殆ど考えられない塞辺の戦闘にも思いを致す。「出塞七首少陵に效う」（『僑呉集』巻一）其の二「秦時左戍を問い、漢家弛刑の徒。髑髏瀚海に棄てられ、天陰り哭くこと嗚嗚。我生還を望むに非ざるも、魂魄は帰途に迷う。但だ願う戈と矢との利きを、身を委ねて狂胡を断たん。吁嗟載筆の書、紀さず万骨の枯るるを」杜甫の「出塞」詩と同様、何らかの当時の戦争を意識するだろうが、ここでは鄭元祐の空想の広がりを指摘したい。「我生還を望むには非ざるも」というように、戦う兵士の気持ちになりきっている。なお面白いことには、清の元詩選はこの詩を引用するが、「胡」の字を欠字とする。四庫全書所収本『僑呉集』に至っては一句をそっくり変える。神経質な自己規制を要求する清朝の抑圧的な支配に比べ、元の支配はかなりルーズであったことがこれでも分かる。それに鄭元祐は元を「胡」の一つと考えているのではなくて、元朝の立場に立って、憎むべき敵を「狂胡」と表現したに過ぎない。

このような外部への志向は、江南が元朝に征服されたからこそ元朝と一体感をもつことによって生まれたのだと筆者は考える。思考は江南に限られることなく、その外へと広がっていく。しかし、それは全世界まで広がるものではなく、元朝の版図までせき止められる。それ以外の土地、例えば日本については、空想的でまた旧来の表現の常套を出ない。何人か日本人僧と交流があるが、不思議の世界の住人としてのみ描く。「聡首座遊昇聞極日本人を送る」（『僑呉集』巻二）「聡也金鰲の背上の人、金翅海を擘き波を駆る神」。「贈日本僧」（『僑呉集』巻二）「海は島嶼を以て

連城と為し、其の大なることは毎に龍伯と争う。珊瑚の柱は冷たく宮闕を建て、翡翠の波は暖かく蓬瀛を開く。亦た神僧の其の国を出づるあり、能く古佛と無生を同じくす」。「題夷僧写蘭巻」（『僑呉集』巻二）「老禅昔日本従り来る、足は万里を踏み鯨波を開く。金仙居る所は大霞の上、五色の芝草は楼台と為す。国香の中に蘭と蕙と有り、叢を成し根を托し蓬莱に在り」。「送銛仲剛遊金陵」（『僑呉集』巻五）「銛衲は日本の東従り来る、説法親しく曾つて老龍に授く」僧という特殊なものどもであり、日本僧の方でも神秘的なムード作りに励んだ面もあるであろうが、海外の異国人に対して、不可思議なる者、神秘的なる者として見るだけでそれ以上掘り下げない。陸続きの住人は同胞、海の向こうはロマンの世界という区別があるようだ。だからこれらの僧が中国に来てからの描写は、普通の常人の僧としての描写となる。要するに、鄭元祐の江南を越えた思考の広がりは、元朝の人間としての一体感による。

もっとも一体感といっても、地域ナショナリズムと並立して成立している。「漕府李侯の北に帰るを送る序」（『僑呉集』巻八）「燕は召公国を啓きて自り、其の世系は、周と始終す。世に燕趙は悲歌慷慨の士多し、と言う。夫れ聖賢の過ぎりて化する所を更て、其の習俗の懿美、人士の傑特は豈に但に悲歌慷慨而已ならん哉。国家朔漠に肇興し、燕都に鼎を定む。百餘年来、燕の人士は其の才を以て用いられ、内にしては廟朝、外にしては郡国、蓋し魁奇偉特の士多ければなり」古来から現代に至るまでそうであるが、中国は異様なまでに地域閥がつよい。ここでも燕を土地の名称ではなくて、古来からの国ととらえている。裏返しに見れば、そういう鄭元祐の属する江南社会には呉国または越国としての歴史意識とナショナリズムがあるわけである。にもかかわらず、統一国家は統一国家であって、燕も古代は「周と終始」したからよかったので、まったくの独立というのではない。燕人も呉人も越人もモンゴルに支配されているから、その秩序を通して同じ人間としての共感を得るのである。もちろん古来漢字文化によって地域文化が互いに接着していたことはいうまでもないが、それよりはモンゴル統治による一体感の方を筆者は強調したい。モンゴルの統治によって江南社会には、北方出身の漢人が支配階級に多く混じるようになったのだから、それに合わせてナショナリズムも性格を変質するのが当然である。

かくのごとくモンゴルの統治下において、江南ナショナリズムは、他地域と違うという自意識を高めつつ、江南地

域を越えて、元朝版図全体を志向する。『徐元度を送る序』（『僑呉集』巻八）は徐元度なる人物が米作を北方に移植するために、江南を離れるのを送った時の文章である。

「周は后稷を以て興る。故に其の子孫は天下を有つや、郊廟に於いて其の功烈を薦饗して而して之に声詩を被う者は、一えに是農事を以て言と為す」中国の伝統が農業を重んじる事を周の始祖にして、農業の創始者とされる后稷から説き始める。それに対し「我が朝廷朔漠より起こり、百餘年間未だ始めより農桑を以て急務と為さず」これは中国の文明では異質のことであるが、もちろんそれを批判するのではない。「欽しんで惟うに、世皇は東征西伐して、豈に東南の稲米を知らんや」世祖は創業の戦に忙しかったのだからいたしかたなかった。今や安定期に入った。我が江南の稲作文化を利用せぬ手はない。そして新たな事態が現れた。「然れども既に鼎を燕に定め、海民の朱張氏有りて設築して海運を通ず。海艘を用て順風を趕（おえ）ば旬に浹（およ）ばずして而して畿甸に達す。其の初めは十万の若きに過ぎず。利を興すの臣、歳に増え年に増し、今乃ち千万の若きに至る」経済の拡大と交通流通の発達である。かくして北方の民も米を要するようになる。江南の米作の技術を北方に伝えるべきゆえんである。「是に於いて畿甸の民は、口を開きて哺を待つ」かくして徐元度が応募して北方へ開墾に赴く。南方の文化の一つが北方に広がる。その期待は大きい。鄭元祐はこの海運と関わりが深い。先に自分の息子の就職をねらったのも海運関係であった。交通の拡大と発展、これが前代と違う点である。それは、目を全中国に開かせる。さらに江南の優れた文化を全中国へという野望も生じる。世界を志向する心の動き、それが鄭元祐の諸作品の背景にある。「余は老いたり矣」先は短いが「尚お其れ或いは之を見んことを庶う」北方に南の文明が広がっていくことを期待する。その精神の志向が彼の作品には見えかくれする。この外部への志向が、やがて江南を根拠地とした明王朝の全国統一へと流れていくと筆者は考える。

筆者自身、自らのナショナリズムがいかなるものか考えあぐねる時が多く、まして時代と地域をことにする、元末の江南ナショナリズムについて論ずることは難しいが、少なくとも錯綜した雰囲気、空気が、時代や地域を覆っており、それが人々の行動や文化に微妙な影を与えているであろうことは断言しても良いであろう。何か、普遍的、超時

代的な価値観を措定して、元代の文化、たとえば元詩を論ずることは、あまり意味がない。元詩の文学的快楽を最大限に味わうには、その背後にある作者さえも自覚しない空気を体得する必要があるであろう。